

# 豫科練



No.463 令和3年

3・4月号

○連載（シリーズ海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑）No.5…	2
○連載（シリーズ海軍飛行予科練習生遺稿）……………	3
○第五十四回予科練戦没者慰霊祭のご案内……………	4
○菅野理事長に自衛隊武器学校長より感謝状……………	4
○三四三空隊史⑤……………	5
○死線を越えて②……………	8
○翼を奪われ陸戦特攻隊へ②……………	11
○緑十字の白い二番機①……………	14
○雄翔館見学者所感……………	19
○寄付者芳名簿・事務局日誌……………	23

公益  
財団法人

海原会

海軍航空要員の大量、急速養成の要求に基づき、飛行予科練習生の大量採用が行われその教育専門の練習航空隊として、昭和18年10月1日に開隊し、甲飛第13期前期が入隊して教育を開始した。隣接して松山航空基地があり、先輩の10期が「零戦」の実用機教程で猛訓練中であった。翌19年12月25日には第三四三空が開隊し、最優秀の搭乗員を集めた「紫電改」戦闘機隊が配備され、有名を馳せるといふ予科練教育隊には極めて恵まれた環境の練習航空隊であった。

海軍に

心をこめて

敬事

予科練出身

予科練

予科練

予科練

高松宮妃殿下御歌

藍ヶ浦に立ちて海軍飛行  
予科練習生を偲びてよめる

海はらに

はたおほそらに

敬事せし

さみら声なく

いく春やへし

この御歌は、高松宮喜久子妃殿下の御直筆で、有栖川道と申しあげ、妃殿下はその御宗家にあられると承ります。

## 海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑 予科練の碑 No.5

ここで教育を受けた予科練出身者は、戦後この地に青春の断ち難い思い出の象徴を残そうと、隊門近くに最初は木碑を建立したが、永久に航空隊跡である事を残すために、松山空出身者で建立委員会を結成し、広く建立協賛者を募って、この「碑」を跡地の一角に建立したのである。



松山海軍航空隊跡碑  
(松山市北吉田金比羅宮前)



甲飛13期前期・後期、同14期前期  
同後期、同15期、同16期前期  
乙飛24期の一部

所在地

松山市北吉田・金比羅宮前

建立年月日

昭和60年11月3日

# 海軍飛行豫科練習生

遺書 遺詠 遺稿 辞世

## 書簡

九五三空所屬  
海軍二等飛行兵曹

山本竹次

十九歳  
福島県

### 第十二期甲種飛行予科練習生

これからそちらは寒くなつて行くでしょうが、私はこれから、暑くなる所に行きます。毎日の新聞で見る如く、向こうは毎日の敵襲で、私も働き甲斐があることと満足しております。

比島では、もう全機特攻隊と言われている如く、私もいつ征くかわかりません。

向こうに行くので、必要なものをお送り致します。帳面など、弟妹達にやっつけて下さい。筆入れは見ておわかりのように、私が中学校に入る時、お母さんと一緒に行つて買つていただいたもので、海軍に入つてからずっと懐かしく使つたものです。遺品にという訳ではありませんが、お送り致します。

時計はいつも持つてばかりいて、ゆつくり直す暇もなく、あまり使いませんから、家で直して使つて下さい。中はそれほど悪くありません。角力をとつて、針がとれたのです。

今退隊するのですが、向こうまでは船です。今になって何もいうことはありませんが、家の名を恥かしめるような死に方は致しませんから、ご安心下さい。

家の皆様も寒さに負けずに、元気にお暮らして下さい。  
では、さようなら。

父上様

外地勤務艦隊の命令で昭和二十年一月に同空所屬の同期生と共に、特務艦（讃岐丸）に便乗中に、北緯三三度五五分、東経一二二度五五分（東支那海済州島西方沖）にて敵潜水艦の雷撃を受け沈没し、九名の同期生と共に散華する。

## 第五十四回予科練戦没者慰霊祭のご案内

第五十四回予科練戦没者慰霊祭は、コロナ感染拡大を防止するために、昨年同様に規模を縮小して開催することといたします。

なお、慰霊祭に出席する海原会役員と、共に心を同じくして慰霊祭を行うために会員皆様には玉串料を募集いたします。

### 一 慰 霊 祭

日 時 令和三年五月二十九日(土)

午前十一時から

場 所 雄 翔 園

(陸上自衛隊土浦駐屯地内)

参加者 海原会役員等及びご遺族代表に限定

慰霊演奏 甲飛喇叭隊

### 二 写 真 展

期 間 令和三年四月二十日(火)～

五月三十日(日)

場 所 雄翔館内 特別展示コーナー

テーマ 「雄翔園の四季」

写真提供 陸上自衛隊武器学校

広報援護班 皆木義時 氏

### 三 その 他

会員及びご遺族の皆様には、玉串料の募集要領につきまして別途ご案内申し上げます。

## 菅野理事長に、武器学校長から感謝状が授与されました。

去る令和二年十一月十三日、海原会理事長の菅野寛也氏に対して、陸上自衛隊武器学校長兼土浦駐屯地司令 陸将補 六車昌晃様から感謝状が授与されました。(六車学校長は、十二月二十二日付で自衛隊を退職されました。)

菅野氏は平成二十九年六月に海原会理事長に就任され、現在二期目が半分経過したところですが、この間に公益財団法人海原会の理事長として武器学校の校務運営、特に雄翔館の展示や慰霊祭をつうじて入校学生の資質の陶冶に貢献された事に対する感謝の意が表されました。

本来であれば、武器学校の創立記念行事の式典の中で、出席者の祝福の拍手の中で受賞の予定でしたが、コロナウイルス感染拡大防止の観点から、行事が中止されたために理事長のご自宅

に感謝状を郵送する形で実施されました。

掲載いたしました写真は、菅野理事長が院長を務めておられる病院の屋上に設置されたF-186「日米親善のため」と当時の駐日大使のマンズフィールド氏から贈呈されたものです。の前で喜びを表す菅野理事長です。

(事務局)



## 三四三空隊史⑤

### 菅野大尉遂に帰らず

三上 光雄

(三〇一・旧姓 堀)

#### 筒内爆発

昭和二十年八月一日、沖縄基地から飛来する敵機に対して、鹿児島南方で一撃を加えるべく、久しぶりに出撃が令された。指揮官は鷲淵大尉の死後前任飛行隊長となった菅野大尉であった。三四三空全力の出撃なのであるが、かって沖縄戦酣のころ、七十二機の大編隊を組んで堂々進撃した威容はすでに失われていた。

二十機を僅か一、二機を超える兵力、これが三四三空の全力であった。搭乗員も、半年前に三四三空が編成された当時の人は大部分が亡き数に入っており、そのあとには気鋭ではあるが、飛行時数の少ない搭乗員が補充されていた。

したがって「俺」とこの列機

はちよつと激しい操作をやるつもりと飛ばされてしまう」とこぼす区隊長が少なくなかった。

私の搭乗割は菅野区隊長の後につく二区隊長であった。菅野区隊長が滑走路から浮き上るのを見計って私の区隊も滑走にうつった。指揮所附近に飛行長、要務士、整備員たちがずらりと一列横隊に立ち並んで帽子を振っていた。その姿がぐんぐん後ろに遠ざかっていった。この人たちは、今日も誰かが選ってこない、いたましい思いで見送っているのであらう。

二十余機の編隊を組むのには手間はかからなかった。かつて、七十二機とか四十八機という大編隊で飛んだとき味わったあの心強さ、頼もしさはもはや二度と経験し得ないものとなっていた。

高原半島を過ぎないうちに隊長の二、四番機が、ほとんど同時にエンジンから油を黒く噴きだして大村に引き返えした。続いて私の区隊でも三、四番機がエンジン不調のため引き返えした。そこで私たち二機は、同じ

く二機に減った隊長の区隊に合流し、私は隊長の二番機の位置についた。



菅野大尉

当時の出発時の編成については誰であったか今では思い出すことが出来ないが……。(昭和五十二年七月二十二日、かつての戦闘三〇一飛行隊の有志は戦後三十二年ぶりに思い出の地松山道後のホテルで再会、殉職や戦死した人たちの慰霊を行ない、互いの生存を確認し合った。

出席者は、松村正二元分隊長始め、搭乗員二十四人と遺族関係者五人、それに地元松山在住の下宿先やクラブだった大西琴子さん、三宅ツユ子さん、安高キクエさんも懐かしい顔を見せた。その時の出席者の話を総合した結果、合流した菅野区隊長は

菅野隊長、三上光雄(旧姓堀)、近藤福吉(旧姓真砂)、田村恒春の四機であったことが確認出来た。

編隊は九州西岸に沿って高度をとりつつ南下を続けた。薩摩、大隅の両半島を遙か下に見ながら過ぎ、高度六千米で屋久島近くに達したとき、隊長が同島の西方、高度五千米附近にB-24二機が編隊を組んでゆっくり旋回しているのを発見し、電話でわれわれに報せた。B-24の方向をよく見張っていると、その後方からさらにB-24一機が、その編隊に追いつこうとして現われた。そうだと、ここは沖縄を飛び立ったB-24の集合点になっているのだ。

隊長機の腹の下から増槽が離れた。直ちに私も増槽の落下策を引いた。コッソリとした手こたえを感じる。続いてさらに一機、B-24の小さな姿が後方に見え出した。

隊長は旋回中の敵機の上空へ直進する。

B-24は三機と二機の二個編隊に増え、旋回を止めて緊密



隊形のまま南下しはじめた。敵機の各銃座から突き出た機銃は、みなこちらに指向されている。

われわれの編隊は、針路を約五十度南寄りに変え、その前程に占位するように下降気味に進んだ。左斜前千米につくと、隊長はチラと後上空を見た後、機首を下げ、敵と反航態勢で攻撃に入った。私も咄嗟に後を追う。

目標は敵編隊の左端二番機。敵五機は機銃を一斉に射ち出す。私の風防外をシューツ、シューツと赤い炎が行き交っている。何を——と照準器を覗きこんだが、それにも曳跟踪が映った。

一撃かけて敵の後下方の射距離外につき抜けた。急降下の途中突如として「機銃筒内爆発、コチラ、カンノ一番」と電話が入った。

機を引き起しながら隊長機を探すと、前上方に引き起しているはずの隊長機が見えないのである。機を水平に戻して、四周を見回したが見つからない。翼を傾けて右下方を覗くと、ずっと下を水平に飛んでいる。直ちに降下して追いかけた。

## 攻撃第一

隊長機の左後についたとき、隊長機は緩かな旋回を始めた。隊長機が敵機と同航になったとき、その左翼に孔があいているのが発見出来た。「やつぱり！」と思った。

少し高度を高めて近寄り上から覗きこむ。翼の中央、日の丸のマークの少し右に大きな破孔がある。日の丸の直径の約三分の一ほどの大きさだ。日の丸の直径は一米近い。発砲の瞬間、二十耗弾頭の信管が作動して銃身内で炸裂したのである。

私の方をふり仰いだ隊長と目が合った。首を傾け、顔をしかめて「しまった」と言いたそうな表情である。爆発によって翼の強度が減じているだけでなく、速力も落ちているので、もはや空戦どころではなく、あるいは帰還の途中、墜落してしまいはしないかという心配も湧いた。電話を使って隊長にいろいろ問合せていたが、混信防止を強調されているので、直接戦闘に關係しないことには無線電話を使う

わけにいかなかった。

隊長と私とは、剣部隊編成以来ともにたびたび生死の境をくぐり、多くの搭乗員が大空に散ったなかで、不思議に生を保っている。しかも、編成時の三人の飛行隊長のうち、ただひとりの生き残り隊長である。

いま、もし敵戦闘機が現われたならば大変なことになる。B—24攻撃も大切であるが、私はぜひとも隊長機を護衛しなければならぬと決心した。全周を警戒する。B—24はさらに一機増え三機、三機の二個編隊となっている。

隊長は指先でB—24の方向を示した。いうまでもなく「俺に構わず敵を追え。攻撃第一だ」という意味だ。私は二、三度頷いてみせたが、依然二番機の位置を離れなかった。

すると隊長は、左手の指を三、四回敵の方へ投げつけて私を睨み、攻撃に行けと督促する。それに対して私は左手を挙げて隊長の意図はすでに了解していることをはっきり示し頑是ない子供を「よしよし」とあやすよう

に、大きく二、三度頷いてみせた。指揮官機を失うのは列機搭乗員の大きな恥である。この際は止むを得ないと、私は隊長の命令を無視した。

後下方から見ていると、上空の紫電改の攻撃ぶりは残念ながらほとんど効果を發揮していない。遠くから射ち始めて、早めに回避しているとはか思えない。B—24は一機の落伍もなく飛び去って行く。歯がゆくてならぬ。闘志満々の菅野大尉のことである。

指揮官として出撃した立場もあって、B—24を一機も墜さず逃がしてしまうのは、私以上に口惜しい思いをしているのだろう。隊長は私の方へふり向いてこんどはこぶしを固め、拳固でなぐる恰好をした。隊長は飛行眼鏡の中からきつと私を睨みつけている。完全に怒りだした表情である。私は少し前、大村の料亭でいくらか酒の入った隊長が、どこかの隊の軍医少佐と口論を始め、ついにボカボカ殴り始めた様子を思い出した。それならば、隊長の命に従う

より仕方がない。私はバンクしながら目礼を送った。怒った隊長の顔がやわらいだ。

おもえば、このときの隊長の顔が最後となったのであった。さつと隊長機の後を去り、敵の方へ高度をとった。隊長はその場で大きな旋回を始めた。ここで部下を待つつもりなのだ。上から、隊長機の翼にボツカリあいた破孔を見ると、翼が今にも折れそうに思えてならなかった。敵機は、びったり編隊を組んだまま、私の七、八千米先を南方へ回避する。その上高度差が千米以上もあった。私はたびたび隊長機を見かえりつつ敵を追った。

B-24に対して攻撃位置につくまでおよそ十五分もかかったろうか。私は前上方から垂直上攻撃をかけた。六機から射ち上げてくる曳弾の流れは、風防の左右、上下をかすめ通った。他機の尻びり腰の攻撃をくやしがつた私も、心にかかるものがあるせいも、どうも調子があらず、残念ながら適確な射撃ができなくてほとんど効果はな

った。

もう一撃と想って高度をとっているとき、隊長から「空戦ヤメ、アツマレ」と電話で指令してきた。私は急旋回をして屋久島の方向に機首を向けた。隊長機は先ほどの高度より上昇しているはずはない。こう考えた私は、機首を突込んでぐんぐんスピードをつけた。

私には、隊長機の護衛につくことがこの際最大の願いであった。

ところが、屋久島の見当から、隊長の待機地点と思われるところにきて、隊長機が見えないのである。「カンノ一番、カンノ一番」と幾たびも呼びかけたが、何の応答もない。

私の胸は波打った。前後左右を見廻し、海上も入念に探したが、どこにも見当らない。もしや屋久島海岸にでも不時着したのかと島に近づいてみた。海岸をずーっと念入りに見ていったが、機体らしいものは何一つなかった。

そこで上空を見廻しながらふたたび「カンノ一番、カンノ一

番」と呼んでみたが、何らの答えもなかった。

そうこうしているうちに、紫電改が六機集まってきた。もしかすると、隊長は電話故障のまま一足先に鹿兒島に向ったのかもしれないと考え、私は六機を纏めて大村に針路をとった。空戦後の燃料はこれ以上の搜索を許さないのであった。

### 失われた大黒柱！

大村基地に着陸して滑走の行脚が止まり、整備員が翼の上にながらってきたとき、まささきに彼の耳に口を寄せて大声で聞いた。

「隊長は帰られたか」

「いいえまだです」

整備員はあつさりと答えた。事情を知らぬ整備員は全く心配していない。私は、志賀飛行長が吹流しの傍に立っているのを見つけると、機をとび下り、飛ぶようにして駆けていった。

「飛行長！ 隊長機が筒内爆発を起しました」

「なにッ！」と云った途端、飛行長の顔は硬ばった。筒内爆

発は翼を吹飛ばすこともあるほどの大きな事故である。

飛行長は、私の目を凝視してつぎの言葉を待っている。私は隊長機の左翼の破損状況と、隊長がどうしても護衛につくのを許さなかったことを説明し、「帰途もずいぶん時間をかけて探がしまわりましたが、ついに発見できませんでした」とつけ加えた。



大村基地の筆者（左）と佐藤上飛曹  
有馬一飛曹の顔も見える

驚ろいた飛行長は、直ちに山の指揮所にいる源田司令に電話で報せるとともに、要務士に対して鹿兒島の諸基地に、菅野機の不時着の有無を問合わせるよう指示した。だが、いずこの返事でも首野機の話は得られ

なかった。もうこのころでは菅野大尉の名は諸基地に知られていたのであるが……。

一方、この間にも編隊が崩れてバラバラとなった機が二、三機つぎつぎと基地のかたの空に姿を現わした。そのたびに飛行長や私たちは、それが隊長機であるようにと念じながら、望遠鏡でひたすら見つめた。また電話が鳴るたびに全神経をそば立てるのであった。しかし待てども待てども、とうとう隊長機は姿を現わさなかったのである。指揮官機の最後を確認するのは列機の役目であった。隊長機の左翼が揚力を失って自転に入り、そのまま海中に突っ込んでしまったのか、あるいはまた、突然現われた敵戦闘機に食われたのか？不覚にも、私はそれを見届けていないのであった。私は司令、飛行長の最も期待していた指揮官を、護衛の任を果たさず未帰還にしてしまったのである。その自責の念で、私は司令、飛行長の顔をまともに見ることができなかつた。この時、飛行長からガンガン怒鳴られ叱

責されたら、どれだけ気が楽になるかもしれないのに、飛行長は、「君は菅野隊長の命令に従って、B-24を攻撃するためには離れたのだから……」と。

隊長のお通夜は行われず、当分行方不明者として扱われることになった。隊長が生還することとは万々望みがないことであったが、これも最期が確認されていなかったとられた処置であった。菅野大尉の後任には、分隊長の松村大尉が補せられた。

それ以降は、決戦にそなえて温存方針がまもられ、空戦らしい空戦もなくやがて敗戦の日を迎えることになる。

思うに、紫電改は優秀な局地戦闘機であった。紫電改とF6Fとの性能の開きは、開戦当初の零戦とF4F、P-40など諸機の敵戦闘機ほどではなかったが、とにかくF6Fに対抗して、対等の技倆があればこれを撃墜できる戦闘機であった。

昭和十六年開戦以来、海軍戦闘機の主力としては、ただ零戦一機種で押通された。昭和二十

やく紫電改部隊、雷電戦闘機隊が編成されたのに反して、米軍はP-40、P-38よりP-51へ、またグラマンF4FよりF6Fへとつねに日本側に二歩も三歩も先んじつつ新機種を出現させた。

そのうちでも、F6Fは終戦時太平洋側を制圧した零戦打倒を目標として産み出されたものであった。そのF6Fに勝てる戦闘機として製作されたのが、我々の紫電改であった。 続く



紫電改二一型

## 死線を越えて②

海原会会員

甲飛十六期 松室 將幸

この記事は、松室將幸氏が平成二十六年に海上自衛隊小月航空基地において、航空学生の方々に講演された内容を、書き起こしたものです。

工場の中は修理中の航空機で一杯の状態でした。裏の空き地や横の空き地には、機体のついた形状から、滑空機と思われる機体が駐機されていました。しかし、今まで乗ったグライダーでもなく、複座のスマートな小型飛行機にも見える機体でした。説明を受けると、それこそ地上発進用の「桜花四十三乙型」滑空爆弾特攻兵器の訓練用滑空機だということでした。そこで初めて自分達が訓練をするべき機種が判明したのです。

説明によると此処から数キロ離れた宇佐海軍航空隊に「桜花部隊」が配備されていたが、宇佐航空基地が集中爆撃を受けて



使用不能となり、大分航空基地に移り、従来の桜花部隊は解散したとのことでした。

しかし、情報によると十月一日から十一月中旬にかけて米軍の九州地区上陸が行われると見積もられるとのことで、敵上陸軍を水際で粉砕するために桜花部隊の再編成が行われるとの事でした。

そこであらためて特攻隊員の募集があり「ひとつ・辞退、ふたつ・希望、みつつ・熱烈希望」の三項目だけが書かれた願書が渡され、随時に希望箇所に○印をつけるよう促されました。

お互いの顔を見合わせながらも全員熱烈希望に○印をつけ、晴れて全員特攻隊員と成ったのです。

そこで初めて自分達の本来の目的目標がはっきりとしたわけでありませう。

私が所属した航空基地の一日は、夜明けとともに急降下してくる米戦闘機P51による波状攻撃、小型爆弾による滑走路の爆撃、機銃掃射、そしてそれを迎え撃つ対空戦闘が始まりました。

た。

大分海軍航空隊では、百戦錬磨の自慢の戦闘機部隊は他の航空基地に移動し、残っているのは殆ど艦上爆撃機ばかりでした。このため、早朝敵の来襲を予測して大半の艦上爆撃機（以下艦爆機と記述する）は低空回避に飛び立ち、残る機体は松林の中へ退避させ、整備員により偽装をしていました。

空襲が終わると低空退避していた艦爆機は三々五々帰投して、ただちに爆装を整えて敵機を追尾、敵航空母艦に奇襲をかけるという戦闘が毎日の日課でしたが、敵艦影を捕らえることができずむなしく掃射する様なことが日常茶飯事でした。

一方、敵の空襲を受けた基地では、飛び交う十字砲火の、まるで豆を煎るような騒音と硝煙の中を、地上掃射にむけてダイブしてくる敵機に、ミシンの縫目さながらに吸い込まれるように打ち上げられる対空機銃の曳光弾、そんな状況の中を、身を挺して被弾した兵士のもとに駆け寄る衛生兵、まるで地獄絵巻

の中のような毎日のあり様でした。

そんなある日、私は、所用で移動中、掩体壕まで行きつけずに遮蔽物もない飛行場に取り残された機体を発見するやそれに跳びつき無意識のうちにその機体を推し進めていました。

その時、ほんの一瞬の事です。私の視界が消滅し何も見えないう状態になりました。

てっきり私が被弾したのかと思いましたが、痛みもなにも感じない。しかし、目が見えない。

目を着衣の袖で拭くと、視界が真っ赤に染まりました。更に拭くと薄っすらと元の視界が見えるようになりました。そしてその時、隣に棒立ちになったまま首から上の顔がない兵士の姿が目に入りました。

当然機体も被弾しましたが、炎上する事もなく我々二人をその場に残して他の兵隊に押し込まれて掩体壕へと移動していきました。その間どのくらいの時が過ぎたのか今では測り知ることはできませんが、これが戦場の実態です。

でも、それで恐怖を感じた覚えも無く俺はまだ生きていて、死んでたまるかという変な覚悟のような、信念のような敵愾心の様なものが胸中にむくむくと湧きあがったことは確かでした。後で考えると、その時の信念というか覚悟が後々の私の運命を暗示していたように思われます。そのことについては後でお話ししましょう。

空襲も終わり、自分の任務を終え、よほど空腹であったのか食べ物求めて給食所を目指しました。給食所では、自分では気が付きませんでした。頭のてっぺんから足元まで血みどろの姿に、私自身が負傷していると思われたのか「大丈夫か大丈夫か」と声をかけてくれ周りの兵も士官も優しく接してくれました。

恐らく怖い顔をしていたのでしようが、何もかも一瞬の出来事で、緊張はしていたのでしようが恐怖を感じる事も涙を流すこともなかったと思います。一番驚いたのは、後に略帽や衣類を洗濯した時に、いくら濯いで

も濯いでも流す水が血で染まる事でした。

今考えると、大分航空隊に到着した時から連日、早朝は飛来した米戦闘機による掃射と爆撃、夜間は大型機による空襲爆撃の連続でただの一度も訓練らしい訓練も出来ませんでした。

空襲後は、誰が命令することもなく、周辺の片付けが行われ、その場に居たものがそれぞれ気を利かせて行うような事が自然に成立して行きました。

だが、私には、行動を共にする直属の分隊長も班長も側にはおられず、班員もいない。

私は大分基地に配属された直後、まだ右も左もわからない時期に、直属の班長からの特命を受けて、次の出撃を控えた搭乗員の身の回りの世話と、出撃し未帰還機となった搭乗員の遺品整理に専従して行きました。

その為に、常に単独の行動を許されて行きました。主な用務の内容は、日用品の買い付けで、各先輩搭乗員から個別に依頼され、毎日のように公用の腕章を着け暇を見つけては別府市内ま

で外出しておりました。

しかし、其の中で最も大切な用事は、別府の名産品の「湯の華」を買い求め、依頼者の先輩搭乗員のご両親に送り届ける仕事でした。

しかし、「湯の華」を入れた郵便小包は、部隊からは直接送れないので、買い求めた店から直接依頼者の搭乗員のご両親の元に送り届けてもらいました、そしてその際、ご本人はお元気に勤務しておられることを、書き添えてくれるように店に依頼する事が私の日課でした。

私の勤務した数か月の間に、いったい幾人の搭乗員が出撃したままで二度と帰投してこなかったことでしょうか。

同時に一生私の胸中から忘れ去られない出来事がありました。それはまさしく終戦当日の出来事です。

久しぶりに所属班長の元を集められ、雑音でほとんど聞き取れない玉音放送を聞かされました。

班長から戦争が終わった事を告げられ、全員が呆然とする中、

班長から「全員、第一種第二種軍装を提出」、「予科練入隊時から撮り溜めた写真等は今後の身の安全のため全部焼却」等の処分が言い渡されて、なす術もなく身の回りの整理に取り掛かった時でした。

各所のスピーカーから「手の空いた者は全員滑走路周辺に集合」の号令がかかりました。何事かは判らないけど、ただならぬ気配の中で三々五々と皆滑走路の周辺に集まりました。

あちらこちらで、搭乗員達の怒号のような声が聞こえるが、まだ何事が起っているのか判らない。

しばらくすると、何処からともなく「宇垣艦長官が特攻に出撃される」との声が聞こえて来ました。

その時心の中では「もう戦争は終わったのではないのか？」と狐につままれた様な気持ちでいると、遠目に搭乗員の言い争う姿が見えました。

周囲の者に聞きただすと、長官に搭乗機の座席を取られた偵察員の兵曹長が、長官に食いつ

いて座席を取り戻そうとしてかなわず、長官の股座に座りこんだという事でした。

又その他、「直接機は五機」と長官から機数を絞られ、残った者が争っているという事でした。そのうち列線に並んでいた艦爆全機のエンジンが始動を始めましたが、そのうちの何機かは遠目にもエンジン不調の様子が見て取れました。

結局地を蹴って大空に舞い上がったのは彗星艦爆十一機、搭乗員二十三名、指揮官機操縦員中津留大尉、偵察員遠藤飛曹長、同乗宇垣長官随って計二十三名の者が出撃したのです。

全機八百キロの爆弾を搭載していたと思います。十一機のうち、途中でエンジン不調の為三機不時着、内七名生存、八機の突入は報告されましたが、戦果等については不明ということでした。

後に聞くとところによると全機岩礁に自爆したとも伝えられたと聞きます。

いずれにしても尊い命が無駄にされた気持ちで胸の詰まる思

いで一杯でした。命令するのも長官なら、血気にはやる若者を思いとどまらすのも長官であつたらうにと、私は今でも悔しく思うのです。

大海令が発令されたのが十六日とは言え、我々は玉音放送が流れた八月十五日には終戦が現実のものとなり、その日の夜は、まず、「もう死ななくても良いのだ」と夜空を見上げながら咄嗟に思ったものです。

ただの一度も本来の訓練をすることなく、ただただ、毎日の空襲に耐え、寄せ集めの残存機を使って奇襲をかけるのみで、その度ごとに貴重な人命と機体を消耗しながら、ついに終戦を迎えてしまったのです。

翌日から戦後処理の作業に取り掛かったのですが、我々はあらゆる軍の痕跡を残さぬように、手あたり次第焼却作業に明け暮れていました。

数日すると「広島出身者は状況がわからぬが兎も角先に帰れ、帰ってから最寄りの官公庁で指示を受ける」の一言で、衣納袋

に僅かの衣類と軍足一対分の米、携帯食数個を詰め込み、現金は幾等であつたか覚えていませんが、持ち合わせていた全てを持ち、一日も早く故郷の実家の様子が知りたく終戦の四日後には貨車の復員列車に乗って広島駅にたどり着いたのです。

これからが私の本当の苦難の道となるのですが、先ず皆さんに伝えておきたいことがあります。

もし、あの予科練時代の過酷な涙の出そうな地獄のような日々の猛訓練を乗り越えていなかったら、恐らく右も左も判らない私がたった一人で戦後の混乱期を生き抜いては来れなかつたでしょう。

そして、それからが本当の私が生きてゆく長い苦闘のはじまりでした。

話を復員にもどします。終戦四日目、広島出身の我々は無蓋の貨車の復員列車に乗せられ大分を離れました。夕方広島駅に到着、と言っても屋根も何も無いプラットホームに降り立つと何処から手に入れたのか四斗樽

に水を浮かべた冷たい清水を四、五人の粋の良い兄さん方が木の柄杓に水を汲んで「兵隊さんご苦労さんでした。お帰りなさい。」とそれぞれが水を配っておられたのです。

樽の傍に日本刀を杖について椅子にデーンと座っていたのが、後の日活映画「仁義なき戦い」で一躍有名になった広島島の東の岡組（確か映画では村上組となっていたと思います。）の親分さんだったのです。

その親分こそ私には忘れることの出来ない因縁の繋がりができた方だったので。

駅頭でうろろろ迷っている私に、「何処に行きたいのか」と声をかけてくれたのがその岡組の親分で、「今大分から復員してきたばかりで、生家の跡を見つきたい」と言うと、住所は何処かというので、実家の住所を告げると、「松室さんの息子か」と驚いた様子で「今後何処へ行くつもりか」といろいろ聞いてくれて、「困ったら訪ねてくるように」と住所を教えていただいたので

続く

## 豫科練の戦争②

久山 忍 著

翼を奪われ陸戦特攻隊へ

甲飛十四期 戸張 礼記

予科練志願

太平洋戦争勃発、父の急死という一大事を経て、私は中学二年から三年に進んだ。

その間、戦局は刻々と不利となった。ミッドウェー海戦、ガダルカナル島の戦い、アッツ島玉碎のことなどは国民に知らされなかつたが、戦局の悪化は肌で感じていた。国家存亡の危機から学徒動員となり、少年少女たちは軍事教練を強いられ、国民は根こそぎ、軍隊へ、軍需工場へとかり出されていった。

かといって皆がそれを苦にしていたわけではない。それが当たり前前のことだと思っていたのである。

今考えれば不思議なことのように思えるが、当時の日本は軍国少年たちであふれかえっていた。

た。

愛する家族を守り、祖国の平和を守るために軍隊に行くことは当然のことだと思っていた。反戦などという概念すら世の中になかった。

そして少年たちの多くはパイロットに憧れた。大好きな飛行機に自分の夢を乗せ、国家の危難に想いを重ね、一人奮い立っていた。飛行機大好きな少年たちの憧れはなんといっても「零戦」であった。とにかく格好よかったです。誰しもが乗りたかったです。私の祖国防衛に対する強い意志も、単純に言ってしまうえば零戦に乗って空を飛びたいという単純な欲求であったように思う。

私は中学校では滑空部に所属していた。グライダーを訓練する部活である。いつからともなく私は空への憧れを強めていた。国家が流布する「来たれ決戦の大空へ」のキャンペーンにのって、少年の夢は一路空へと簡単に羽ばたいていった。

結局、私は予科練を志願するのだが、今思えば、時局に煽られた軍国少年の気負った夢語り

が動機であったように思える。

気取って言えば「大空への憧れだった」となるが、正直な内情を吐露すれば、零戦搭乗員の白いマフラーが恰好よかったという、ただそれだけが志願の動機だった。

その時の私は、大人たちが喧伝する広告に従うだけの思考力しかなく、  
(そのコースに進めばあとは自動的に国・あるいは軍・が自分の夢をかなえてくれるだろう) という依頼心ばかりが強い若者だったのだ。

中学三年も三学期のころ、母の心配もよそに私は予科練を志願した。しかし合格通知も何もなく、勇んで志願しただけに日本男児の面目なしの思いだった。後で聞いた話だが、母たちは、「受からなくて良かった」と言っていたそうだ。

私は中学四年甲組に進級した。そして新学期が始まってまもなく、まだ落ち着いていない時期に予科練の採用通知書が届いた。「昭和十九年六月一日、土浦海軍航空隊へ出頭せよ」

という文面だった。私は晴れて飛行予科練習生(甲種)となつた。そして私は、喜び勇んで入隊した。

自から進んで軍に行くなど、今の人には考えられないことだろう。

予科練への志願は無知なるがゆえの愚行だったのだろうか。そう今も自問する。そして「それはちがう」と私は私に答える。当時、軍国少年だった私たちの心の根底には国を想う心が脈々と流れていた。

我々の愛国心は純粹でゆるぎないものだった。それが無知から生まれたものであつても、盲信を礎として構築されたものであつても、自国を愛し、それを護ろうとする心に偽りはなかった。

私の同期(彼は六十三分隊、私は六十五分隊)の氏家昇君が著書

『蒼の記憶』の巻頭詩で私たちの真情を書いてくれている。(本書二十八ページに掲載)  
私の心に最も迫る一編である。

### 予科練の日々

土浦中学四年(十六歳)、一期の半ばに私は土浦航空隊(現陸上自衛隊武器学校)に入隊した。

海軍甲種飛行予科練習生第十四期(二次)生であった。

入隊後の練習生の厳しさは軟弱な坊ちゃん育ちの私にとつて地獄そのものであった。歯を食いしばって耐えた。罰直という制裁もひどかった。通称「バツター」という。野球のバット状のもので力いっぱい、臀部を叩きのめされるのである。その棍棒は「海軍精神注入棒」と称され、

「憎しとて叩くにあらず竹の雪」と書き込んであった。

バツターとは恐ろしい制度で、一人がミスしても、班対抗の競争に負けても、なにかにつけて連帯責任として全員が殴られた。口惜しさで泣こうとしても、あまりの痛さに涙もでなかった。

しごきと制裁の一日が終わる夜、ぶつ倒れるようにして釣り床(ハンモック)に這い上がる。

毛布をひっかぶって丸くなると、しみじみと家が恋しくなる。そして猛訓練で綿のように疲れ切った体はいつの間にか眠りこけてしまう。一日は長く、眠りは早く、朝はすぐに来る。そしてまた過酷な一日が始まる。

朝六時、総員起こしのラッパとともに跳ね起き、釣り床を一分で片付ける。一分以内にできなければバツターだった。まだ暗い第一練兵場の朝礼台前に総員集合する。

軍艦旗掲揚、宮城通拝、号令演習、海軍体操、当直将校訓示などがあって、信号受信訓練（無線・発光・手旗・旗燈信号など）もある。

朝食後、課業整列、駆け足で（移動は全て階段も駆け足）訓練開始だ。訓練は心身ともに強靱な海軍飛行兵を養成することに目的として超強制的に実行された。主なものをあげると、器械体操、相撲、水泳、短艇、無線通信、発光、手旗信号、航空力学、航法、精神講話、一般教養など多岐にわたるものであった。



土浦空甲飛14期（二次）の第65分隊第3班37名。後列左から4人目が戸張氏



茨城県立土浦中学校滑空部の部員たち。前列左から6人目が戸張礼記氏

全てにわたって敢闘、忍耐、機敏さが要求され、強靱な体力が必要であった。グライダーを使った滑空訓練もあった。

これは中学校の滑空部で慣れていた私には楽しい訓練だった。



当初は無我夢中で耐えるだけだった予科練生活も、慣れるにしたがい心身ともにたくましく成長し、徐々にではあるが生活に余裕がでてきた。

昭和二十年二月十六日、当時予科練生であった私は、土浦航空隊で訓練中、初めて頭上で空中戦を見た。

朝食の準備中、「第一警戒配備」の放送があり、続いて「退避」の放送があった。急いで第一練兵場の防空壕に駆け込んだとき、私は気になって防空壕の前で空を見上げた。

上空では、ドン、ドン、ドン、と黒煙がいくつも炸裂している。我が陣地から打ち上げられている高射砲の砲弾だ。

突然、黒煙の合間から黒っぽい機体が一機、ゲオーツという凄まじい音を引いて湖の方へ落ちて行った。

「やったー」

私は膝を叩いて喜んだ。敵機がやられたと思ったのである。続いてまた一機、航海学校（現、曙町）の方向に落ちて行き、パツと落下傘が開くのが見えた。

よく見ると黒い人影が首を垂れて吊り下がっていた。後で二機とも友軍機（日本軍の飛行機）であることを知った。湖水に降りた落下傘のパイロットもすでに遺体となっていたことも聞いた。この日、空の戦いの非情さを初めて知った。

今、我々（予科練平和祈念館歴史調査委員）は関東空域の防衛戦闘で無念にも撃墜され、あるいは自爆して戦死したパイロットたちの調査を進めている。我々の先輩たちが亡くなった場所を特定して供養するためである。

しかし記録が満足に残っていないため場所の特定が難しい。あらかじめ地元の人が石碑等を建ててくれた所はわかりやすいのだが、目撃者がいない戦死者を地図上に落とすことは不可能に近い。

幸運にも特定できた地点には、花や線香を供えて順拝している。今の私たちにできる精一杯の慰霊である。とここで、いったい何人くらい、関東空域戦没者がいるのだ

ろうか。「海軍戦闘機隊史」（零戦搭乗員会編）から抜粋してみた。

関東上空における空戦による戦死者は、合計一七八人である。

次の表を見ると二月十六日の戦没者が圧倒的に多い。この日、空ではどんな戦闘があったのだろうか。

その概要を資料により見てみよう。

#### 関東空域戦没者

- 海兵出身 四十一名
- 予備学生 三十六名
- 甲種予科練 四十一名
- 乙種予科練 十八名
- 特乙予科練 二十名
- 丙種豫科練 二十二名
- 合計 百七十八名

戦没者数（同日に複数の戦死がでた日）

- 昭和二十年二月十六日 二十三名
- 昭和二十年二月十七日 四名
- 昭和二十年六月二十日 二名
- 昭和二十年六月二十三日 十一名
- 合計 四十名

次号に続く



種山平一  
(乙飛十六期)

#### 使節団輸送命令

昭和二十年八月十七日、連合軍から「降伏打ち合わせのため、天皇の委任状を有する全権使節団をマニラに派遣すべし」との来電が参謀本部に届いた。

全権には、参謀次長川辺虎四郎中将が団長となり、陸海軍十数名と外務省の二名がその随員として参加することになった。停戦命令から二日目の木更航空隊は大混乱であった。八月十七日〇七三〇頃、飛行分隊長の森義美大尉は、

「八月十八日正午までに必ず到着せよ。若しこれに違反した場合は、占領軍がいかなる行動に移ろうとも日本軍には一言の言訳も許されない。と云う命令が来ているそうだ。是が非でも本日に飛行機を整備して、明日八日早朝発進できるように準備せよ」

と苦痛と焦燥にゆがんだ顔で伝達した。昨日までの温顔は消え去って別人のようであった。

木更津航空隊の大混乱の中で、私たちの飛行機だけが静かに見えたのは、このとんでもない飛行任務を遂行しなければ、日本の命運が左右されるという巨大な責務を背負わされて、周囲を見廻す時間がなかったからである。

混乱は何処の部隊も同じことだが、分隊長森大尉の人徳の故か、それとも、敗北の実感が現実の形で目の前になかったのかも知れない。

一式陸攻を、使用するとすれば塔乗員は七名位かな、さて誰が行くのかな、気の抜けた頭の中でそんなことを考えていると、指揮所の前にワツとはかりに黒山の人だかりである。

操縦 少尉 河西義毅(操練)  
偵察 飛曹長松田芳雄(偵察)  
電信 上飛曹種山平一(乙16)  
塔整 上飛曹安全泰英(高整)  
射撃 二飛曹小柳勝(特乙I)  
と発表された。

機長の河西少尉とはひさびさのペアである。

このところ勝田重治中尉(操練)や近藤義宣少尉(甲2期)を機長として飛行していたので、河西少尉とはあまり話す機会もなかった。勝田中尉は、南京渡洋爆撃から、重慶、成都、蘭州の爆撃行に参加した古強者で、プリンス・オブ・ウエルズ撃沈の雷撃戦を経験した抜群の操縦員であり、近藤少尉は南太平洋と大陸をわがもの顔に暴れ回った猛者であった関係上、全く気の置けない機長である。

使用する一式陸攻は、木更津航空隊と併設されている二空廠で整備中であり、明日に備えて身の周りの始末やら飛行要具の準備やら、ポーツとした頭の中で何か追い立てられるようにただ動きまわっているうちに、もはや夏の日も暮れて来た。

八月十七日夜、私たちは、第一格納庫横にある指揮所から燃料車に乗って、約二キロほど離れた二空廠に急行した。各航空隊が同居している木更津航空隊だけに零戦、紫電、彩雲、銀河、

流星、九七艦攻、天山艦攻、一式陸攻などが、そこそこに黒々と点在している。戦い破れ、刀折れ矢尽きたという感じはさらになく、機首をキツと持ち上げて中空を睨み、今にも飛び立つばかりの雄姿に、敗戦はとも信じられなかった。

二空廠の中は、凄かった。無数の隊員が一式陸攻に取り付き、手塗り刷毛や動力噴霧器を使って、機体を真っ白に塗っているのである。

「何だ、こりゃあ」  
私は思わず怒鳴った。田舎芝居の役者の顔か、鹿屋の女郎の顔じゃあるまいし、なんで機体を白く塗るんだらう。一同呆然としていると、整備科の下士官の云うには全部白く塗って日の丸の部分には、緑の十字を書くとのこと。

「これに乗って行くのか」  
「・・・らしいです。今夜十二時までには完了せよとの命令です」  
これはまあ、何とも可笑しなものだ。

重量感あふれるあの「濃緑色」に日の丸の一式陸攻が、眞白に

塗られて行くのを見て、只々たまげる外はなかった。



これがおれの棺桶かと思つたが、武装解除で二十ミリ、十三ミリ、七、七ミリの各機銃は全部取り外されてほんとの丸腰である。

これで敵地に飛行して、しかも敵の飛行場に着陸して使節団を米軍に送り届けるのが私たちの任務と聞かされているが、さ

てそのあとは我々搭乗員たる者、  
一体どうなるのか。

死刑か、それとも本國まで運  
行されてサラシモノにされるの  
か、とにかく尋常一様なことでは  
済まされたいのは、確かなこと  
だ。戦死なら覚悟の上だが一  
戦も交えずに死刑とは全く嫌な  
ことだ。フヌケ同様の頭の中で  
何を考えているのか判らないま  
ま時間は徒に過ぎて行つた。

八月十八日、暁暗に起床した  
私たちは、朝食もそこそこに指  
揮所に集合した。試運転音は快  
調である。今回の部署は、電信  
席であるから機内に入りテスト  
する。

尾部に行くとき二十ミリ銃が  
取り外されて、ぽかんと大きな  
穴が開いているだけである。勿  
論丸い弾倉も無い。サイドの七  
七ミリも機首の十三ミリ銃も、  
上部の二十ミリもみんな無い。  
こりゃ丸裸だ何のことはない。  
ただの旅客機じゃないか。これ  
で伊江島に行けば素手で喧嘩す  
るより手はない。

景気よくチャンチャンバラと  
空戦でもやっつて戦死したら「故

海軍飛行兵曹長種山平一」てな  
ことになるならいいが、丸腰で  
行つて捕虜になり、さんざんこ  
ずき廻された挙句の果てに殺さ  
れたら、靖国神社にいる同期の  
連中が「貴様ロクな死にざまを  
しないんだから過番練習生の特  
命があるまで食卓番だ」なんて  
言われそうで急に切なくなつた。

「おい、発進中止だぞ」の声に  
我に返つて振り向くと、河西少  
尉がいる。聞いてみると霧が深  
くて離陸時間に間に合わないか  
ら、明日に延期するとのことだ  
ある。

外に出てみると、なるほど霧  
が深い。〇八〇頃までに晴れ  
そうなのだが、命令だから  
仕方がない。張りつめた気合が  
抜けて機内に入ると、安全兵曹  
と小柳兵曹が来て、エンジンの  
整備を始めたので、一緒になつ  
て手伝つていると、山川整備長  
が見えて機の周りにも次第に慌  
ただしさが流れて来た。

一日中大忙しだった。身の回  
りの物は殆どサイパン玉砕の時  
に無くなつてしまつたので、暗  
号書を焼くやら、無電機を壊す

やら、ブーツとしていられるうちに  
一日が終わつたが、夕方から夜  
にかけて大騒動が起つた。

厚木空の反戦ピラもさること  
ながら、あちこちでの泥棒騒ぎ  
やケンカ騒ぎやら大山鳴動して  
ネズミ数千匹の有様であつた。  
明くれば運命の日、昭和二十  
年八月十九日。快晴である。

私たちは〇五〇〇には飛行場  
にいた。

搭乗員整列〇六三〇、分隊長  
森義美大尉が訓示した。

「帝國海軍航空隊を代表して敵  
地に赴く重大なる任務を自覚し  
て各員それぞれに部署において  
最善を尽くし、顧みて悔いを残  
さぬよう努力せんことを望む。  
万一の時は沖繩に散華せし特攻  
機のとに続くべし」

「敬礼」

河西機長の号令で一斉に敬礼  
して解散したら、新聞記者が数  
人来て、一人ひとりの官氏名、  
出身県、住所をメモしている。

私のところにも来た。今の心境  
は？ 家族への伝言は？ と矢  
継ぎ早の質問に面倒くさくなつ  
て、「無いです」の一点張りだ

一目散に乗機の方に走つた。機  
内に入つて驚いた。何時の間に  
乗つたのか知らないが、飛行服  
を着けない士官服の人やら背広  
服の人やらで一杯である。何処  
からこんなに大勢の人が湧いて  
来てこんな事になつたんだ。

一式陸攻の座席は主操、副操、  
機長、電信、機首の偵察の五つ  
くらいで、あとに正規のシート  
らしいものは無い。今日は副操  
と機長の二つの席が空いている  
から、まともに座れるのはこの  
二つくらいのもので、あとは適  
当に場所を作って座るより方法  
はないのだ。暫くして、なんと  
なく偉そうな人が機長席に座つ  
た。

随員松田政雄中佐（参謀本部  
航空作戦班長）であり、この人  
が二番機の指揮をとることにな  
つた。それにしても、これから  
六時間、通路に座っている人た  
ちは大変なことだろうと思つ  
た。

「ピーッ、ビビピーッ」とブザ  
ーが鳴つた。いよいよ発進であ  
る。私は最後尾に走つた。尾部  
の二十ミリ銃座である。頭の重

い一式陸攻は、尾部に一人か二人いることよって、多少なりとも尾部の持ち上がりや少なからずする為の方策である。昨日までここに二十ミリ機銃の銃身が遅く突き出ていたのに、今日はポツカリ大穴が空いていて何とも頼りにならないことお話にならない。青草がプロペラの風になびいて機は徐々に滑走路に向かい、そして停止した。いよいよ離陸である。

### 木更津基地発進

前席に走り窓越しに見ると、総員帽振れで見送ってくれている。

見送りの中に「プリンス・オブ・ウエールズ」撃沈に参加した操練出身の勝田中尉、私を可愛がってくれた甲飛二期の近藤少尉、乙飛十八期堀田儀一、甲飛十一期甲斐慎介、同藤崎 浩、陸奥爆沈の時艦務実習の生き残りの甲飛十一期畑中 毅、特乙飛一期尾崎芳平、同南波五郎、甲飛十三期杉本治男等々の顔が見える。見えて消えて、懐かし

い木更津海軍航空隊！ 大井空飛練三十二期偵察専修の教程を無事卒業して、さて、わが身の行き先はと待っていたら、当時歌に歌われた「鬼の木更津、地獄の横空」と云われた木更津だった。その鬼の住む木更津も、今は母なる懐かしい安息の地に思えて胸の中から熱いものが突き上がって来てならない。

はたして無事に帰ってこられるかどうか？ 戦闘的発進ではなく、やりきれない悲しみの離陸である。軍用機の離陸は、すべて戦闘を意味する。爆撃、銃撃、偵察、観測、護衛、すべてが作戦任務遂行上の戦闘行為である。だが、今日の飛行任務は戦闘ではない。国際法に規定されている緑十字の安全圏とか何とか、難しいことが、一飛行科下士官に判る筈もない。河西少尉も松田飛曹長も、洲崎灯台を過ぎてから、ようやく針路の指示を受けたらしい。後で聞いたら厚木の戦闘機部隊が私たちを撃墜しようと画策していたそうである。

○七〇〇に発進し、東京湾を

超低空で抜けて館山、洲崎灯台を過ぎて洋上に出た。何処でどうなったか全くわからないが横空から一機、これも真白くお化けみたいに塗った一式陸攻が編隊を組んでいる。これが一番機で、私たちが二番機である。一番機が横空と無線連絡を取った。すぐさま私も連絡を取った。今日は、暗号文は一切使わない。全文が平文である。呼び出し符号も横空がニホ〇、一番機はホニ一、二番機はホニ二まことに楽である。

電信席にいと、外部の様子よく判らない。そうかといって前席まで、のこのこ行くわけにいかない。搭載電信機は九六式空三号。隊内電話機は、三式空一。左耳に無線のレシーバー、右耳に無線電話機のレシーバー、アゴの下には電話機の咽喉送話器と、首からはコードだらけで動くわけにはいかない。飛行中タッタ一つの基地と飛行機を結び何よりの命綱だから……。約一時間も過ぎたころ、退屈まぎれに前席に行ってみた。安念上整曹も小柳二飛曹も離陸時

のややっこしい操作が終わり機関席（と云っても通路だが）に座っている。上部の二十ミリの砲塔も、銃身が無いのでちょっとした展望台である。よく晴れている。これが戦争の終わった空か、この空で死ぬ筈だったのにとシミジミと見つめたが、そこには何の答もなかった。ぐるりと首を回して前席に行くと、指揮官と河西少尉が話をしたり、前方を指さしたりして頷いている。火星二一型一八五〇馬力二基の発する双発爆音が単調に響き、機内は静かである。「厩所にひかれる羊」そんな言葉が柄にもなく頭に浮かぶ。通路に座った人たちは気の毒だ。尻が痛いのか、あちこち向きを変えたり、部厚い書類をめくったり、黒い鞆をしっかりと抱えて目を瞑ったり、コクリコクリと居眠りをしていたり様々である。

一番機が、横空と連絡を取っている。「伊江島の天候を知らせ」と打っている。すぐに返電があつて、「良好」と云っている。私もすぐに「……」の返信をする。所が二番機の感度

「二三」ときた。おかしいな、こんな近くで、感三とは変だと思ひ再送するとやはり同じである。送信機に異常はないし、緊急電もないのでそのままにして、副操縦席の下にもぐって、機首の偵察席に行ってみた。

チャートを見ると種子島あたりからほぼ南へまっすぐ赤線が引いてある。これで判った。都井岬と種子島をむすぶ線から変針する旨の無電を打つべく横空を呼ぶが、二番機の感度はますます小さくなるとのこと、受信の方は、バンバンだが、送信の方がこのままでは大変なことになる。

二式空三号より使い慣れた九六式空三号に積み変えて来たのに何てことだ。回路、真空管外見は異状ない。アンテナにネオン管をあてて「V」連送してもきれいに点滅する。小柳兵曹を呼んであちこち見たが、別にアースしている所もない。「われ送信機故障、受信良好」と勝手に数回送信して、一番機に隊内電話で知らせたが、一番機もあり調子はよくないらしい。

### 米軍機の誘導援護

突然隊内無線電話が鳴り出した。

「〇×□×△〇□・・・ッ」

何だこりゃあーびびくりしている

とまた「〇×□×△〇・・・ッ」

判ったエーゴ（英語だ）

チクシヨウめ、自慢じゃないが

予科練創設以来この方、お前ほど

出来の悪いヤツは見たことが

無いと云って、大野教官を手こ

ずらせた俺に、何が判るものか。

送信に切り換えて

「わからねーよ、日本語でしゃ

べれッ、このバカッ」と云って

受信に切り換えるとまた「〇

×□×△〇□・・・ッ」であ

る。困った。これは困った。

予科練の名督にかけても解説

せねば、先輩諸氏に申し訳ない。

同時に、本日の飛行任務の重要

性から見ても、これは重大なこ

とが起きたに違いない。

えらいことになってしまった。

エーイままよ。ここは深呼吸一

番とばかりに胸を張って首の運

動をした。

その視線の先に若い士官が通路に座っているのが見えた。色白で細身の少尉だ。きつと学徒出身だな、戦場の空気を吸っていない頭脳士官だな、それなら英語は判るかも知れないと思ひ、及び腰で話すと、ドレドレとはかりに立ち上がってきてくれた。暫くして受信機の上に日本語の文字が流れた。

「我々が誘導する。その通りに

飛行せよ」受信機をひったくる

様にして河西少尉の肩越しに突

き出して思わず「ウワーツ」と

叫んだ。

いるわいるわ、P38がざつと

見て二十数機、丁度水族館の水

槽の中を泳ぎまわる魚のように

ぐるぐる旋回している。こちら

はせいせい一八〇〇二〇ノッ

トそこそこだから一緒に編隊を

組むのは大変だろう。そのうち

大きな魚を見つけた。B25とB

17である。

B17は、私たちの前を悠々と

飛行している。

B24なら二十年一月頃、硫黄

島から木更津への帰途北硫黄島

の上空で追撃され、尾部の二十

ミリで叩き落とすことはあるが、B17をこんな近くで見るとは初めてだ。さすがテックカイ。大型機同志の追尾戦になるとこの串団子みたいな化け物、なかなか墜し難いな、なんて考えていると、右横から黒い魚がスーと寄ってきた。B25だ。翼端が触れ合えばかりである。

機首に書いてあるのは、ありや何だ？

機首全体が怪魚の大化け物にな

っていて、グワーツと口を開

けて、真つ赤な口から鋭い歯を

むき出してている。

そして、翼のつけ根あたりは

ポパイの漫画である。ポパイの

ように腕を振り上げたなら、ニヤ

ニヤ笑って手を振った。カメラ

や撮影機が一斉にこちらを向

いている。

B25がスーッと前に出たら、

今度はB17が横に来た。何のこ

とはない。敵味方の編隊飛行で

ある。これが漢文で習った呉越

同舟と云う奴だな。今度はもつ

と驚いた。スッ裸の金髪女が大

蛇にぐるぐる巻きにされている

画が機首に書いてある。



余程画の好きな人種と見える。みんなポカンとして見るだけである。

どうせ送信機は故障だし、そこは二番機の気楽さから一生の見納めとばかりに空中見張りならぬ空中見物とシャレこんだのである。

午後一時ごろ、河西機長が前方を指さした。沖繩本島らしい。いよいよ来たぞ。思えば今こうして飛行しているコースを、数日前までは何千機の仲間たちがうら若い青春の命を賭けて爆装と共に、どんな思いを胸に秘めて大空に昇華して行ったことだろう。

凄絶な空戦、天日のために暗くなるような防空砲火、その中へ敢然と突撃する特攻機の中には数え切れぬ程の仲間がいた。

塚越茂登夫、池本利雄、岡 雄、原 啓治、下村千代吉……数え出したらきりが無い。

貴様たちのチャートにも同じコースで赤線が引いてあった筈だ。今日の俺は同じ針路ヨロソ口でも、「突撃」ではなくて「運

行」されて行くのだ。

ジャケットの背中には「第三航空艦隊、飛偵、種山上飛曹と白ペンキで大書しデツカイ日ノ丸が書いてあるが、今はこれが恥ずかしい。

十九年六月、サイパンで玉碎していれば、靖国神社でも同期の先任者で威張って貴様たちを迎えられたものを。身代わりに死んだ、茂原市の鈴木 隆がきつと待っていてくれただろう。ポロポロ涙を流し、泣きながら思い出す限りの同期の仲間を心の中で呼んでいた。

伊平屋島、伊是名島を右手に見て、いよいよ伊江島が近づく。北緯二十五度のこの島は、一見空母みたいに見える。

艦橋みたいに尖がった山が一つ、伊江城山と書いてある。後は平たいようだが何と全島赤茶けて草も木もないようである。

P 38が一機、滑走路に向かつてスーッと降下してまた上昇する。着陸誘導と見た。

## 雄翔館見学者所感より

○令和二年八月

千葉県

田中様 年令不詳

明日私の想う人が（多分）こちらを訪問致します。その前にと思ひ私も参りました。

やはり何度来ても涙が止まらなくなりませう。

雄翔館は生きる雄叫びが聞こえる場所です。

私の想う人や私の大切な人を二度と戦地にはおくりませぬ。

○令和二年八月八日

茨城県

氏名不詳 六十二才

戦争という時代とは言え、若い命がこんなにもたくさん消えてしまったことに胸が痛みます。生きていて欲しかったと思いません。二度と繰り返して欲しくない。心からそう思いました。

○令和二年八月九日

茨城県

氏名年令不詳

将来のある若者が命を絶たれ無念だったと思います。

政治家の皆さん、まだわからないのですか。戦争は人の殺し合いですよ。

このコロナ禍で、軍事費、防衛費をコロナ対策に使ってください。いくらあってもコロナ禍対策は足りませぬ。

我々の血税をもっと有意義に使ってください。

男たちの暇つぶしにしか聞こえません（防衛対策が）人間の命を何だと思っているのでしょうか？

若い命が無駄にならないように！

○令和二年八月十五日

住所不明

高橋様 四十九才

子科練と同じ年頃の息子がいる母親です。

特攻隊の彼等の使命感、責任感、素晴らしいものだと思いま

続く

す。

しかし、本当のところ、切なくて辛くて胸が痛くなりました。ですが、彼らは確かに生きて懸命に努めてきたことは、現在につながっています。

「可哀想」ではなくて「手柄であった」と褒めてあげたい気持ちで、いっぱいになりました。

○令和二年九月十一日

茨城県

伊藤様 二十六才

初めて見学させて頂きました。

「これが私の命日になるかも知れませんが」この言葉が強く印象に残りました。

そして戦時中、

「お国のために命を捧げなさい」と教えられ、それを信じて死んでしまった人達の想いが伝わってきました。

○令和二年九月十一日

茨城県

伊藤様 五十一才

余りにも若い命が、国を思い家族を思いながら散っていった事実が胸が痛みます。

十八才や十九才なんて毎日が楽しいことばかりの年頃でしょう。

残された人への思いやりも深く、どうしたらこんな素晴らしい若者に育ったのかと、育てられた親御さんに大拍手。

明日落とすかも知れない命のなかで、小さなノートに数学を勉強していた予科練生のことを思うと、今できることはもつともつとあると思いました。

今日ここにきて良かったです。感謝しながら日々を生きます。

○令和二年九月二十一日

埼玉県

F君 十七才

自分は特攻隊は知っていたけれど、詳しくは判っていないだったので、今回を通じて見学すると、自分のような若い人達が、祖国のために、命をかけて体当たりをしていると思うと、勇気が凄いとと思いました。

僕もこのように祖国の為に勇気ある男になりたいと思います。

哀しい戦争でありましたが、

これがあつたからこそ今、平和の日本で生活が出来ていると思うと、感謝しきれないです。

もう二度と戦争がありませんように。特攻隊で亡くなった人々に、ご冥福をお祈り致します。

○令和二年九月二十一日

茨城県

T君 十才

ひいおじいちゃんが、かみかぜとつこう隊だったので、勉強になりました。けど戦争はやっちゃだめだなと思いました。

なんで「ばんざい」と言つて死んでしまったのが不しぎです。みんなお手がみをのこして行つてしまつているなと思いました。

これからは、戦争は二度と、やつてはいけないと思いました。

○令和二年九月二十二日

埼玉県

近藤様 八十四才

とても感動しました。

特攻隊の若者が、父母に対しての、最後の遺言は心が痛む思いでした。

とても今の若者にはない、しつかりとしていた。

○令和二年九月二十五日

住所 東京都

氏名 齊藤様 二十七才

今、こうして平和に過ごせているのはこの方々のおかげだと強く感じました。

とても展示も見易く理解もしやすく良かったです。是非ほかの方にも来て欲しい。

都内などから若者に来て欲しい。今回私は連れてきてもらったけどもともと知らなかったのです。SNSなど活用していくと良いのではないかと思った。

本当に来て良かったありがとうございました。

○令和二年九月二十七日

住所 茨城県

鬼沢様 二十二才

家族に向けて書かれる「サヨウナラ」の言葉の重みが何とも言えない感情になった。

書く側も受け取る側もどんな気持ちだったのだろうと思う。毎日訓練をして、国のために

戦い、亡くなっていった若者たちと比べて、今の自分はなんて生ぬるい生活を送っているのだろうと考える。

過去の人たちの努力や功績を無駄にしないよう、戦争というものが二度と起こらないよう考えながら生きるべきだと思った。

そして今こうして何事もなく生きていられることに感謝し、生涯を全うしたい。

決してこの時代で自ら死を選ぶようなことはしないと誓う。

○令和二年十月四日

住所 不詳

氏名 不詳 三十九才

ただただ心が痛かったです。「お国の為に」と言い聞かせるしかなかった時代、こうして名誉を称えでもしないと報われないのだろうと正直感じました。誰も死にたくはない中で、この選択しかできなかつた思い。

でも戦って守ってくれたからこそ今の日本があるのかと思うと、それも感謝と複雑な思いです。

生まれ変わって、幸せに過ごしている今があることを願うばかりです。

現代の日本を守って下さっている自衛隊の皆様にも感謝致します。自主選択、悔いのないよう、お体にご自愛下さい。ふらっと立ち寄ってよかったです。ありがとうございます。

○令和二年十月七日

茨城県

須藤様 八十五才

一九四二年の時、小学校入学し、太平洋戦争が開戦しました。大本営発表で日本軍の戦果が報じられていました。

私の従兄弟が予科練に入隊し、ある日七つボタンの制服を着て皆で会うことがありました。

彼は戦場には行かず除隊後警察官になり戦後の日本を守りました。

昨年亡くなりましたが、本日予科練記念館を訪れる機会があり色々と思ひ出しています。

そして日本国、日本人の偉大さ、強さ、人間としての素晴らしさを強く感じ、誇らしい気持ちです。

ちで帰宅致します。有難うございました。

○令和二年十月十一日

神奈川県

猪越様 五十才

朝ドラのエールを見ていて、実家近くの子科練を思い出しました。

土浦三高に通っていた頃、野球の応援で歌った「若鷲の歌」の替え歌で応援していたあの頃の自分は、まだ何もわからず、興味もなかったのに、今ドラマを通じて、懐かしい思い出を通して、今日ここにこられた事はまた人生においてほんとに奇跡だと思えます。

同年齢の子供達と来てみて当時の子供たちが国のために戦い散っていったからこそ今の平和があるんだと改めて感謝致します。

有難うございました。

○令和二年十月十三日

住所不詳

矢崎様 四十七才

戦争は残酷ですが(医療技術、

技術革新など産業面では必要なものだなあと思えますが)ここを見るとやるものではないと言ふ思いもあります。

ここに自分の親類がいると親から聴いて来てみましたが、あまりにあどけない顔に悲しくなりました。

大切に写真が飾られていても感謝しております。

複雑ですが起こしたくはないと思う心が消えないようにしていきたいと思えます。

○令和二年十月二十九日

住所不詳

柏崎様 二十一才

難しい言葉など分からないため、私なりの言葉で書かせていただきます。

皆様の最後の手紙や思いなどを見て、読ませていただき、その時の状況を想像しただけでも悲しくなり第三者の私でも心が痛むのに家族の方々や友人の方々や特攻隊の方々の気持ちを考えると耐えられなくなります。

今戦争がなく平和な日々が過ごせているのは、皆様のお陰だ

など改めて思いました。

これからの日々、もつと今以上に大切に生きようと思いましたが。

もつともつとこの場所や特攻隊の方々や他のの方々を多くの人に知ってもらいたいなって思いました。

特攻隊の方々に深く感謝致します。

○令和二年十月三十一日

埼玉県

小川様 二十八才

仕事柄、命をつなぐお仕事なので、日々命について考えさせてもらっています。

私よりも一回り若い皆さんがお国のためであれば死すことも光栄と考えており、ただただ頭が下がります。

今の日本が平和であるのは、皆様の命があつてであると思うとともに、日々の人生、皆様に感謝して生きます。

私も社会で貢献して生きる。そんな人間になります。

○令和二年十一月十三日

茨城県

氏名年令不詳

将来のある若者が、命を絶たれ無念だつたと思います。

しかし政治家の皆さんにはまだ判らないようです。

このコロナ対策に軍事費防衛費を遣つて下さい。

○令和二年十一月十八日

茨城県

米倉様 五十四才

靖国神社の就遊館との提携はされないのでしょうか。

同施設は会員カードを発行していますので、入館割引等があると有難いです。

また外国語表記もあつたほうが良いと思います。英語、タガログ語、スペイン語あるいは旧漢字等旧日本軍が駐留していた所や自衛隊が派遣された国の言葉等。

○令和二年十一月十八日

茨城県

Y君 十二才

見学して、予科練生がしたかつたこと、家族について良くわ

かりました。

予科練生はいろんな人が通つていて月月火水木金金で休みがないことについて驚きました。

ほくだったら絶対に抜け出して夜逃げすると思います。ですが祖国のために予科練生が頑張つていて地元愛を感じました。

この予科練生のお陰で、今の僕たち、両親がいると思いましたが、まだ予科練について物知りではないけれど、予科練生に一言言いたいです。

その言葉は、「ありがとうございます」です。この気持ちで毎日を生きます。

○令和二年十一月二十一日

茨城県

石室様 五十六才

有為ある若者が、多くの戦火に散つた。

その無念の想い。又国家としての多大な損失は、いかばかりか、計り知れない。

もしも彼らが、凶らずも敵国のアメリカで生まれておれば、有意義な人生を送り、国家に対して多大な貢献をしたであろう。

今のアメリカの隆盛を見れば明らかである。

戦争は一体誰の責任であつたのだろう。二度とこの恐ろしい所業を繰り返してはならない。

○令和二年十一月二十三日

住所 不詳

氏名 不詳 四十六歳

二十歳、二十二歳の息子を持つ母であります。

同じ年頃の子が様々な思いを胸にその時を迎えたことを考えると涙が止まりません。

親として喜んで送り出す……今の私には想像もできない。胸が苦しくて、悲しくて……

多くの方々が犠牲となり今がある。毎日些細なことで悩んだり、喧嘩したり、この何でもない毎日を幸せに感じる。改めてそう思いました。

若い人たちにたくさん知ってほしいです。ありがとうございました。

○令和二年十一月二十七日

住所 北海道

氏名 田原武次郎 八十二歳

遺書遺品等拝見し心より残念であった事を想います。深く安らかに天国でお暮らしてください。あなたの方の想いを無駄にしませんから。

○令和二年十一月二十八日

氏名・年令不詳

ここを訪れ涙がこみ上げてきます。これからは遺骨収集や、お墓参り、慰霊祭などに赴き、少しでも彼らが報われる事をしたいと思っています。

将来平和や地球環境問題などの改善に貢献して行きたいと思えます。そして記念館を訪れ更にその気持ちが強まりました。英霊の方々に感謝の気持ちをわすれず、私達は彼らの犠牲の上で生きている事を自覚し、彼らが今の日本を見ても恥ずかしくないような、りっぱな社会を築こうと思います。

(公財)海原会寄付者芳名簿

(敬称略) (単位千円)

令和2年11月15日～1月20日

一〇 赤星 憲司(甲12) 福井

一 堀越 雅子(甲13) 東京

事務局日誌

十一月

十四日

甲飛鷹隊勉強会

於 阿見町

平野理事、徳永理事、行方

参与が参加

二十七日

雄翔園整備用砂利の搬入

平野理事、湯原理事が雄翔園内周遊道路整備用の砂利

を搬入した。

十二月

三日

公益法人協会主催相談会

於 エッサム神田ホール

安井副理事長、平野理事が海原会事務局移転に関する

質疑応答を行った。

四日

日本産業広告社面談

於 事務局

海原会の会員募集に関する提案について

平野理事が聴取した

十五日

会員案内

学生会員の松下様親子を茨

十六日

雄翔園整備用砂利の搬入

平野理事、湯原理事が雄翔園内周遊道路整備用の砂利

を搬入した。

十七日

新コビー機設置

於 事務局

新コビー機を事務局に導入し、運用を開始した。

二十四日

顧問加藤会計士来所

於 事務局

税務署に提出する年末調整資料の作成に関する技術援助を受ける。

二十八日

御用納め

事務局の年末大掃除を行って令和二年の業務を締めくくった。

一月

七日

御用始め

於 事務局

安井副理事長、平野事務局長、岩崎職員、木下職員が参加

訂正とお詫び

豫料簿第四百六十一号で寄付者名簿で誤植がありました。

金井 克己様 誤

金井 克己様 正

右讀んで訂正し、お詫び申し上げます。

- 五 永光 頼光(甲16) 熊本
- 一〇 北村 直也(甲13) 長野
- 五 太田 誠二(乙11) 滋賀
- 一〇 柴山 節子(一般) 千葉
- 一〇 柴山 完宣(一般) 茨城
- 五 行方 滋子(一般) 茨城
- 五 中谷 加藤(乙21) 富山
- 一〇 塩飽フミコ(乙21) 広島
- 五 谷川 諭(丙2) 長崎
- 五 水本 滋信(乙23) 兵庫
- 一〇 明石 英次(甲9) 東京
- 五 戸張 礼記(甲14) 茨城
- 一〇 伊勢 準造(乙24) 秋田
- 一〇 北村 直也(甲13) 長野
- 一〇 城島 宗安(甲15) 長崎
- 一〇 (有) 日本産業広告社
- 五十万円 多田野 弘 (一般) 香川
- 海原会へのご芳志
- 誠に有難うございました。

訂正とお詫び

豫料簿第四百六十一号で寄付者名簿で誤植がありました。

金井 克己様 誤

金井 克己様 正

右讀んで訂正し、お詫び申し上げます。



「子科」第43号(3・4月号) 令和3年3月1日発行 発行人 菅野寛也 発行所 東京 140-0813 公益財団法人 海原会 東京都品川区南大井6-16-12 会 郵便振替 00140-9154332 大森コーポビアン(ズ) 03-3768-3351 定価500円

# お墓

首都圏多数の霊園・寺院墓地を  
ご案内致します。

## 東京都・足立区 舎人浄苑

0.90㎡～

東京都より公益霊園の認証を受けた、舎人公園近くの都心でも希少な好環境の霊園。



## 東京都・港区 高輪メモリアルガーデン

0.45㎡～

都心の緑あふれる閑静な住宅街の霊園。環境・価格ともに大好評の立地です。



## 東京都・町田市 町田いずみ浄苑 フォレストパーク

0.90㎡～

緑豊かな広敷野・横浜みなとみらいを一望し、四季折々の花が彩る好環境の霊園。



## 東京都・八王子市 東京霊園

3.00㎡～

四季のうつろいに永遠の時を刻む、行き届いた景観と設備の公園墓地。



# お葬式

家族葬から社葬まで、  
おまかせください。

## 花で送る家族葬



10名様用

会員価格 580,000円～(+税)

自社総合式場から  
提携斎場まで、  
豊富な式場を  
ご案内できます。



- おおのやホール小平 0120-57-2222
- フェアリングビル横浜 0120-40-0785
- 常光閣斎場(千葉) 0120-03-5005
- セレモ埼玉営業所 0120-79-8008

# お仏壇

ライフスタイルに  
合わせた  
折りのかたちを  
ご提供します。



海原会会員の皆様へは、墓石・葬儀(祭壇費用)・お仏壇を  
会員特別価格にてご提供させていただきます。お気軽にご相談ください。

お墓 墓所工事  
**10%割引**

お葬式 祭壇価格から  
**20%割引**

お仏壇 **25%割引**

お問合せは、  
海原会事務局へ ☎ **03-3768-3351**

株式会社メモリアルアートの大野屋は  
甲飛十四期生 元海軍一等飛行兵曹 大澤静雄の  
次男 大澤静可の経営する、お墓・お葬式・お  
仏壇までご利用いただける会社です。

大野屋グループ  
代表取締役  
大澤静可



大野屋テレホンセンター

評價のご依頼(緊急ダイヤル)24時間受付  
「仏事・葬儀・お墓に関するご相談 (9:00~20:00)」

**0120-02-8888**

メモリアルアートの大野屋  
<http://www.ohnoya.co.jp>

